

「無手勝流のまちづくり」としての長期継続する田んぼアートの実態と持続可能性 —発祥地・青森県田舎館村を起点として—

A study of the Tanbo-Art (rice-paddy art) as an Improvisational Community-Based Placemaking
-Case of Inakadate Village-

菊池 和成*

Kazunari KIKUCHI

The purpose of this study is to reveal the sustaining factors of Tanbo-Art (rice-paddy art) that has continued for more than three decades. The research proceeds in three parts: 1) Tracing the origin and historical development of Tanbo-Art, 2) Examining its regional significance within local communities, and 3) Exploring its nationwide diffusion and inter-regional networks. Through these investigations, this paper offers a new perspective on improvisational approaches to community-based placemaking.

Keywords: Rice-Paddy Art, Inakadate Village, Improvisational Community-Based Placemaking

田んぼアート, 田舎館村, 無手勝流のまちづくり

第1章 緒言

1-1 研究の背景と目的

1960年代以降、日本の地域づくりは「全国総合開発計画」に象徴されるように、国家主導の外発的発展モデルの下で、国土の均衡ある発展が推進されてきた。他方で、その枠組みは意思決定の外在化や地域固有の文化・環境の軽視を招いたという批判を併せもつ。こうした反省を受け、1970年代の後半から玉野井の「地域主義」や、鶴見の「内発的発展論」が提起され、地域の行政的・文化的自律と地域固有の独自性の回復が目指された。

この潮流の延長上で、1980年代に村おこしや一村一品運動などの実践が各地で芽吹き、それを受け青森県田舎館村では1993年、村民主体の「田んぼアート」が始動した。これは田んぼをキャンパスに見立て、色の異なる稲を配植して巨大図柄を制作する活動であり、毎年の田植えから収穫までの稲作のリズムに同期しながら継続されてきた。

やがて田んぼアートは2012年から毎年、全国田んぼアートサミットを開催するようになり、その取り組みは地域内に留まらず、地域外部との連携を図りながら全国に展開してきた。すなわち田んぼアートは、対外的に閉じた地域主義的な活動ではなく、他地域との連携のもと地域の自律を目指す、「共発的発展」⁽¹⁾の事例として位置づけうる。

しかしながら田んぼアートは、一過的な地域おこしとして語られてきた側面をもつ。都市計画領域における研究事例がみられないことも、その見立てを裏づけている。そこで本稿では、村民主体の自走により①発祥から32年にわたり長期継続していること、②地域を超えたつながりが形成されていること、③1次産業的な農事サイクルと同期する、年中を通した活動であることの3点において従来の“一過的なまちおこし”と一線を画する“無手勝流のまちづく

り”⁽²⁾として田んぼアートを扱う。本研究はこの仮説、すなわち「内発」に根を持つ田んぼアートが、村民主体の“無手勝流”の実践を通じて「共発」的に展開してきたのではないかという見立てに立ち、発祥地・田舎館村の田んぼアートの実態と長期継続を支える要因を解明する。そのために以下の3点を明らかにする。

①田んぼアートの発祥と展開過程(第3章)

②田んぼアートの地域的意義(第4章)

③田んぼアートの全国的展開の様相(第5章)

以上から、“無手勝流のまちづくり”に対する視座を獲得することに関心を置く。

1-2 研究の方法と構成

本研究は全6章で構成する。第2章では、全国紙の新聞記事を対象に、言及件数と扱われ方の推移を整理し、外部からの社会的認知の変遷を把握

する。また田んぼアート発祥の地である青森県田舎館村の概要を示す。第3章では、文献調査を主軸に、田舎館村における田んぼアートの成立と拡大を時間・空間・技術の3軸から分析する。第4章では、協議会関係者から周辺主体まで多様な担い手への半構造化ヒアリングを実施し、語りの分析から田舎館村における田んぼアートの意義を論じる。第5章では、全国田んぼアート連絡協議会を通じてアンケート調査を行い、実施団体の基本情報を把握しつつ、田んぼアートが田舎館村を超え、日本全国へどのように波及してきたのかを明らかにする。第6章では、各章の知見を統合し、“無手勝流のまちづくり”に対して本研究が与える視座を考察する。

1 緒言
2 新聞調査
3 田んぼアートの社会的展開と田舎館村の概要
4 発祥地・田舎館村における田んぼアートの実態
5 文献調査
6 田舎館村における田んぼアートの発祥と展開
7 ヒアリング調査
8 田舎館村における田んぼアートの地域的意義
9 アンケート調査
10 田舎館村以降の田んぼアートの全国的展開
11 結論

図1 研究の流れ

* 早稲田大学創造理工学部後藤春彦研究室 学籍番号 1X22A053-4

1-3 研究の位置づけ

1) 田んぼを活用した地域の取り組みに関する研究

田んぼを活用した地域の取り組みに関する研究には、教育的観点から「田んぼの学校」を事例として体験学習の継続性について論じた宮元²⁾がある。また「田んぼアート」に関しては都市計画／まちづくりからの研究はなく、農学・作物学分野での蓄積がある。猪谷³⁾は田んぼアートに使用される稲の品種の歴史変遷や稲の品種分類を行い、青木⁴⁾は観賞用イネの色調推移を定量評価し、見頃調整に有用な品種・時期を示した。

2) 農村地域における観光まちづくりに関する研究

運営組織に関する研究には、棚田の保全組織の実態を論じた佐久間⁵⁾やグリーンツーリズムの運営組織に関する田平⁶⁾がある。観光まちづくりを介した団体間・地域内外の関係性については、農村地域を対象にした研究から観光まちづくりにおける地域内外のネットワーク特性を示した森重⁷⁾の研究、都市と農村の連携によるまちづくりの持続性を論じた小山⁸⁾の研究がある。

3) 研究の位置づけ

以上より、農学的視点からの田んぼアート研究、および農村地域における観光まちづくりの運営組織や地域間連携に関する研究は蓄積している一方、長期継続する団体を対象にその実態を解明し、地域間連携を横断的に扱った研究は僅少である。本研究は、(1)の知見を基盤に(2)の議論を参照し、発祥から32年継続する田んぼアートの実態を明らかにし、全国展開する地域間ネットワークを明らかにすることで、農村地域における、地域を超えた観光まちづくりの連携を論じる点に新規性を有する。

第2章 田んぼアートの社会的展開と田舎館村の概要

田んぼアートの全体像を把握するため、3大新聞にて調査を行い、その成り立ちと社会的展開を整理する。

2-1 田んぼアートの社会的展開の整理

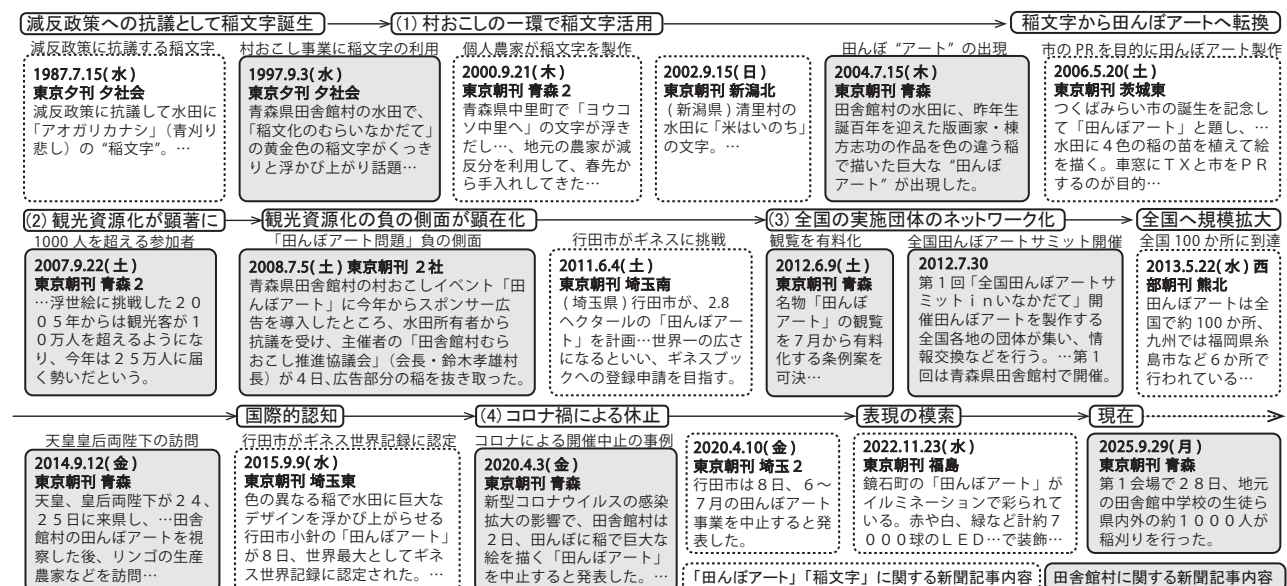


図3 田んぼアートの社会的展開

1) 新聞調査方法

「田んぼアート」と「稲文字⁽³⁾」をキーワードに記事検索を行い、読売新聞で最も多くの言及が確認された(表1・図2)。初出は1987年であり、2008年と2016年に転換期を迎え、2016年に言及数がピークに達して以降、報道頻度とともに情報価値も次第に低下していることが示唆された。

表1 新聞調査で用いるデータベース

No.	新聞名	データベース	キーワード検索(稲文字+田んぼアート)件数
1	読売新聞	ヨミダス	19件+778件=797件→次節で記事抽出
2	朝日新聞	朝日新聞クロスサーチ	36件+715件=751件
3	毎日新聞	毎索	24件+638件=662件

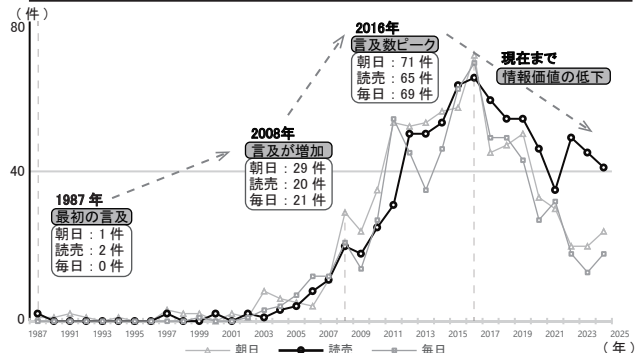


図2 3大新聞による「田んぼアート」「稲文字」言及の推移

2) 社会的展開の整理

読売新聞にて記事内容を抽出し、田んぼアートの社会的展開を整理した(図3)。(1)1997年、青森県田舎館村にて村おこしの一環で稲文字が制作され、2004年には「稲文字」から転じ、「田んぼアート」への発展が報じられた。(2)2000年初頭には観光資源化が報じられ、観覧の有料化やスポンサー導入が見られたが、地権者との摩擦問題も言及された(田んぼアート問題)。(3)2010年代に全国的な展開が加速し、2015年には行田市がギネス認定を受けたことで国際的認知を獲得した。(4)2020年以降はコロナ禍により活動が縮小し、担い手の高齢化や資金難といった継続課題が顕在化し、現在に至る。総合的にみると、発祥の地である田舎館村が全国を牽引してきたことがうかがえる。

2-2 対象地の概要

田舎館村は青森県南津軽郡、津軽平野の南部に位置する農村地域で、東に八甲田連峰、西に岩木山を望む(図4)。面積は22.35km²、人口は2025年7月1日推計で6,770人である。稲作を中心とした農業が基幹産業であり、肥沃な沖積平野と豊富な水資源を活かした米づくりが行われている。

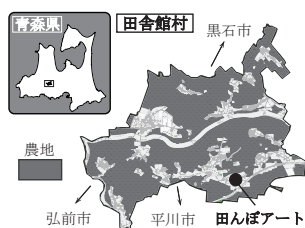


図4 青森県田舎館村の地図

第3章 田舎館村における田んぼアートの発祥と展開

田舎館村における田んぼアートの発祥とその展開過程を、①時間的展開、②空間的展開、③技術的展開の3軸から整理する⁽⁴⁾。

3-1 田んぼアートの時間的展開

1) 32年間／田んぼアートのあゆみ

田舎館村の成立から現在までの時間的展開を示す(図5)。古くから稲作の盛んな地域であり、お米を活用した地域振興に取り組んできた。その文脈において既存の稲作文化を踏まえ、1993年に田んぼアートの前身である田植え体験ツアーが始動した。2002年にはNHK番組「千人の力」を契機に、村民千人の協働で田んぼアートを制作し、以降、村全体を巻き込む取り組みへ成長した。その後技術の進歩と共に作品の完成度は高まったが、2020年コロナ禍により制作が中止され、観光客の減少が現在まで続いている。

2) 1年間／田んぼアートの作品育成サイクル

年中を通した田んぼアートの制作工程と、その主体を示す(図6)。制作は題材決定にはじまり、下絵作成、測量図

作成、田植え、稲刈り、収穫祭への一連の過程で構成される。すなわち田んぼアートは、稲の生育とともに成立する自然共生的なサイクルをもつ。各工程には多様な主体が関わり、工程ごとに主導者が変化する。このリレー形式の協働運営も田んぼアートの継続を支える重要な特徴である。



図6 田んぼアートの時間的展開／1年間の制作サイクル

3-2 田んぼアートの空間的展開

田舎館村の田んぼアート会場および周辺の空間的展開を示す(図7、次頁)。発祥時は役場北側の水田にて稲文字が制作され、翌1994年以降は役場東側の水田を恒常的な制作地としており、田んぼの地権者から役場が借用する形で継続実施している。2012年には、来場者の分散を目的に第2会場を設け、遊園地の池を水田化した。翌年には弘南鉄道「田んぼアート駅」が開業した。観光客の主要な来訪手段は自家用車であり、国道102号線を経由して来場する。会場周辺は市街化調整区域であり、発祥から現在まで大きな土地利用の変化はない。新たな宿泊施設等は整備されず、既存の建物や農地資源を活用しながら田んぼアートが成立・継続している。

3-3 田んぼアートの技術的展開

田んぼアートは、技術進展による使用色稲の増加と共に表現精度が向上してきた(図8)。使用される色稲は観賞用・景観用品種と称され、葉色や穂色が通常の稲と異なり、古

稲作文化の根付いた村		1993 村産米のPR開始	2002 村民を1000人巻き込む	2012 観光化	2020 コロナ	現在
青森県南津軽郡田舎館村のあゆみ	西暦	1993	1993	2012	2020	2025
	田んぼアートに関する出来事	田舎館村に稲作文化の根付いた村として認定される	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事
	1993	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事
	1994	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事
	1995	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事
	1996	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事
	1997	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事
	1998	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事
	1999	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事
	2000	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事
題材の変遷	西暦	1993	1993	2012	2020	2025
	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事
	1993	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事
	1994	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事
	1995	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事
	1996	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事
	1997	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事
	1998	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事
	1999	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事
	2000	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事	田んぼアートに関する出来事

図5 田んぼアートの時間的展開／32年間のあゆみ(上) 題材の変遷(下)

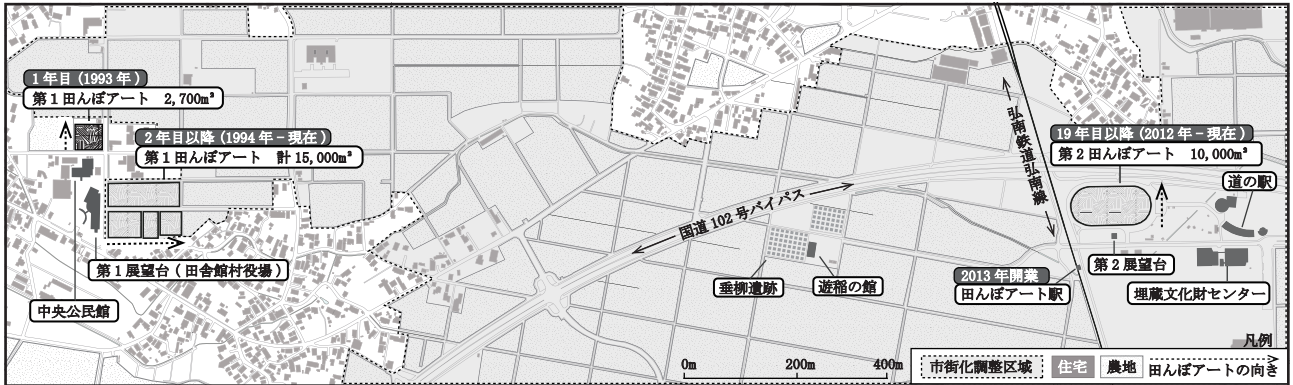


図 7 田んぼアートの空間的展開

くから大学や農業研究機関にて在来品種・突然変異系統として保存されてきた。近年は田んぼアートの需要に応じて新品種の育成も進められている。初期の田んぼアートには在来系統の古代米として紫葉、黄葉、濃緑葉の3色が用いられた。食用米として県産米の「つがるロマン」や「青天の霹靂」を用いたお米のPRも行われた。青森県産業技術センター農林総合研究所水稻品種開発部にて観賞用稲の育種が進み、現在までに7種類の新品種が開発され、県内外の団体に種子を供給してきた。稲の葉色と穂色は独立しており、出穂期には絵柄に変化が生じ、稲刈り前には全体が黄金色に変化する。こうして稲の生育過程そのものが作品の変化を生み出す点も、田んぼアートの技術的かつ景観的特徴である。

使用色稲8色12種類(25年時点)			
出穂により絵柄に変化する			
品種名	葉色	穂色	導入年
短稈紫穂	紫	黄金色	初期から
黄色稲	黄	黄金色	初期から
濃緑	濃緑	黄金色	初期から
はれわたり	緑	黄金色	'23年
まっぴぐら	緑	黄金色	'06年頃
ゆきあそび	緑	黄白	'08年
べにあそび	赤	紫	'10年
あかねあそび	橙	黄金色	'11年
青系観 236号	ライム	黄白	'25年
紫穂波	紫	黄白	'13年
赤穂波	赤	黄白	'13年
白穂波	緑	黄白	'14年

図 8 田んぼアートの技術的展開／使用色稲

第4章 田舎館村における田んぼアートの地域的意義

本章では、田舎館村における田んぼアートの地域的意義の解明を目的とし、制作に関わる16名の担い手にヒアリング調査を実施する(表2)。

得られた語りから、田んぼアートの地域的意義を、①担い手たちの印象変化、②時間的特徴、③地域内外への波及のという人間・時間・空間の3軸から整理した。

4-1 人間／田んぼアートの担い手たちの印象変化

本節では、担い手が抱いた田んぼアートに対する印象・評価を「参加前-参加直後-現在」の軸と共に整理した(図9、次頁)。

参加前の印象は、存在は知るが具体は不明という【存在のみ認知】(7件)が最多で、【発想への感動】(3件)、【未知のものへの関心】【作り方への関心】も確認された。**参加直後の印象**では田植え体験の価値が語られ、【初めての体験する感動】や【手植えの貴重性に対する感動】が継続参加を促した。**現在の印象**では、村における【イベントの多さ】や村民の【外向性の獲得】が評価されたが、課題として地元住民の【マンネリ化】、担い手の【高齢化】、村

表 2 調査 I (田舎館村調査) 概要

概要			
[対象] 田んぼアートの担い手 16名			
[期間] 2025年9月12日～2025年9月14日			
ID	性別／年齢	参加期間	役割
T1	男性/80代	2006年～2024年	田舎館村前村長／むらおこし推進協議会会長
T2	男性/60代	2003年～現在	田舎館村役場職員／企画観光課課長
T3	男性/60代	2003年～現在	田んぼアートデザイナー／下絵作成士
T4	男性/60代	2009年～現在	トマト農家／測量図作成士
T5	女性/60代	1993年～現在	農協女性部長／田植え指導者
T6	女性/60代	2012年～現在	役場(第一会場)観光案内／田植え・稲刈り参加
T7	女性/60代	2019年～現在	役場(第一会場)観光案内／田植え・稲刈り参加
T8	女性/40代	2025年～現在	役場(第一会場)観光案内／田植え・稲刈り参加
T9	女性/40代	2017年～現在	道の駅(第二会場)観光案内／田植え・稲刈り参加
T10	女性/30代	2019年～現在	道の駅(第二会場)観光案内／田植え・稲刈り参加
T11	男性/60代	2021年～現在	道の駅(第二会場)観光案内／田植え・稲刈り参加
T12	女性/60代	2003年～現在	田植え準備期間の飲み物提供
T13	男性/70代	2021年～現在	中央公民館警備員／田植え・稲刈りイベント見守り
T14	男性/70代	2022年～現在	埋蔵文化財センター職員／田植え・稲刈り参加
T15	男性/60代	2008年～現在	埋蔵文化財センター館長／田植え・稲刈り参加
T16	男性/70代	2008年～現在	「田園」未来を築く会会長／田植え・稲刈り参加
調査内容			
調査対象者に対して(a)参加のきっかけ(b)参加前の印象(c)継続・モチベーション(d)地域や人との関係性(e)現在の印象・評価(f)地域全体へのひろがり意識、に関する半構造化ヒアリング			

の【内向性】の残存が指摘された。**参加動機**としては受動的契機(8件)が中心で、【前職からの引継ぎ】、【NHK番組企画】、身近な人からの誘い等が端緒となった。

以上より、田んぼアート制作を契機とした印象変化や、田植え体験による参加動機の醸成の重要性が語られた。

4-2 時間／田んぼアートのふたつの時間

本節では、担い手たちの継続参加を誘発する要因を、時間的側面から整理する(図10、次頁)。

①リレー形式の協働(6件)②自然と共生するアート(11件)③1年単位での絵柄変化(4件)④発祥から32年間での技術進歩(7件)の4テーマが得られた。①は制作の各工程で担い手同士が役割をつないでいく実態を示していた。②は【天候の影響】【風で映える】といった【稲の表現】の特性に加え、【育苗の重要性】【雑草との闘い】など自然と共にあることの醍醐味や難所が語られた。③は【稲の特性を活かした絵柄操作】や生育に伴う【作品の絵柄変化】により、通年で高まる田んぼアートの魅力を示す。④は【遠近法精度】【測量技術】【田植え技術】など表現技術の向上が蓄積し、結果的に村民の担い手意識の醸成に寄与してきたことを確認した。

以上より、田んぼアートが有する1年間・32年間という2つのスケールの時間軸がもつ、田んぼアートでの表現とその担い手意識が更新される意義が語られた。

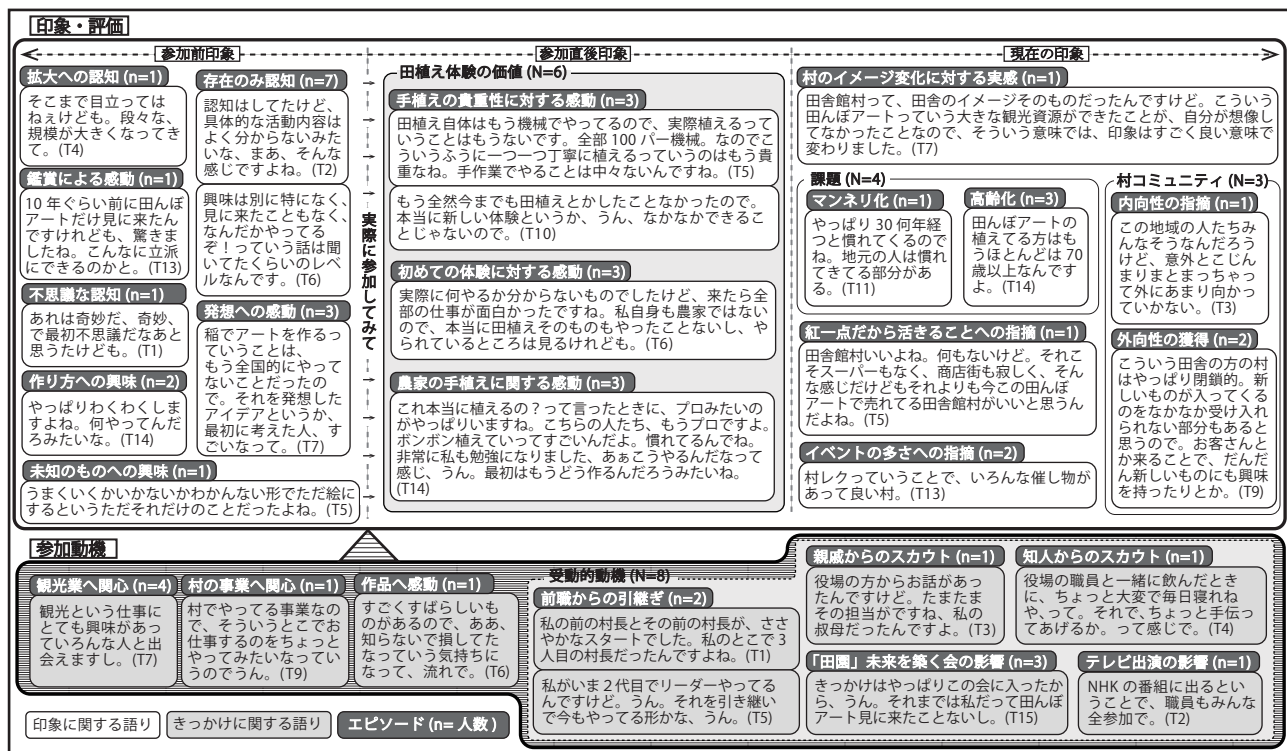


図9 人間／田んぼアートの担い手たちの印象変化

4-3 空間／田んぼアートの地域内外への波及

本節では、田んぼアートの影響を地域内に対するものと地域外に対するものに大別して整理する(図11、次頁)。

地域内に対するものには、価値として人とのつながりが最多で、担い手全員が言及した。主因は年1回の田植え・稲刈りイベントでの交流であり、これを通じて【村民】や【地元農家】、近隣の【小中高生】との関りが語られた。村に対する意識として【自主性の獲得】【協働意識】【村への関心】【地域貢献】が醸成された。また「田舎」館村という【村名に対するコンプレックスの払拭】(3件)も確認された。地域外に対するものには、【村の資源】に

とどまらず、【青森県の資源】【日本の資源】へと田んぼアートの価値の射程を拡張する語りが得られた。また、全国サミットを媒介とした【他地域との交流】に加え、海外とのつながり(9件)が言及された。

以上より田んぼアートは、人とのつながりや誇り意識の醸成と共に、地域内外へその影響が波及してきた。

4-4 小括

本章のヒアリング分析から、田舎館村における田んぼアートの地域的意義は、実践が「更新され続ける」構造にある(図12)。①田植え等の直接体験が参加の初期動機を形成し、②ふたつの時間が自然共生的な性質と共に実践の価

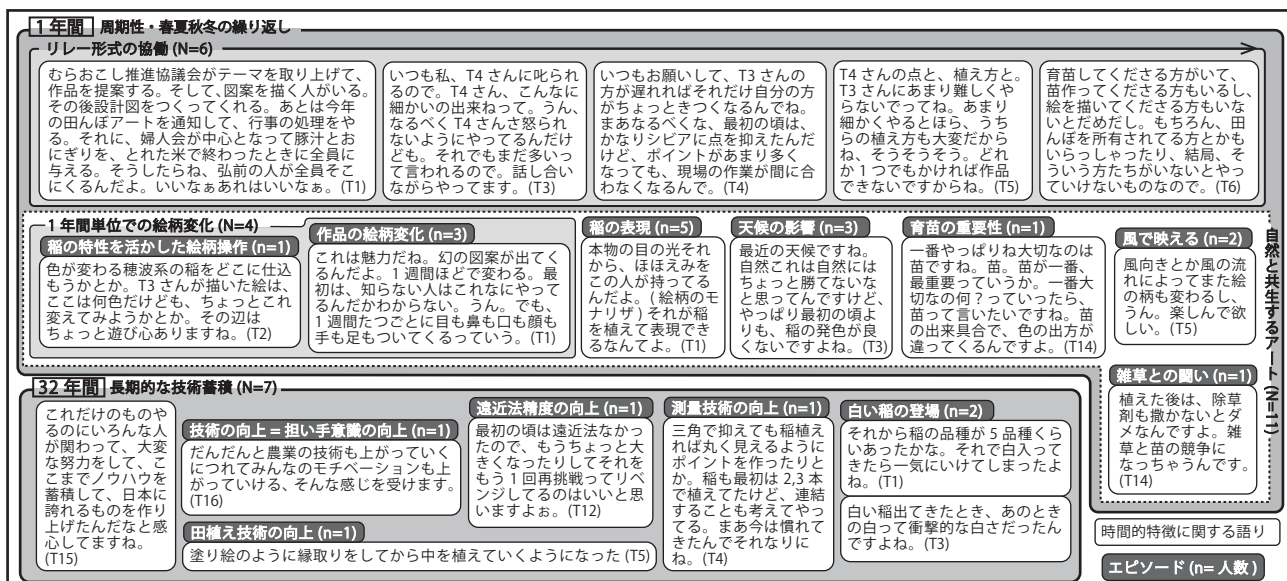


図10 時間／田んぼアートのふたつの時間

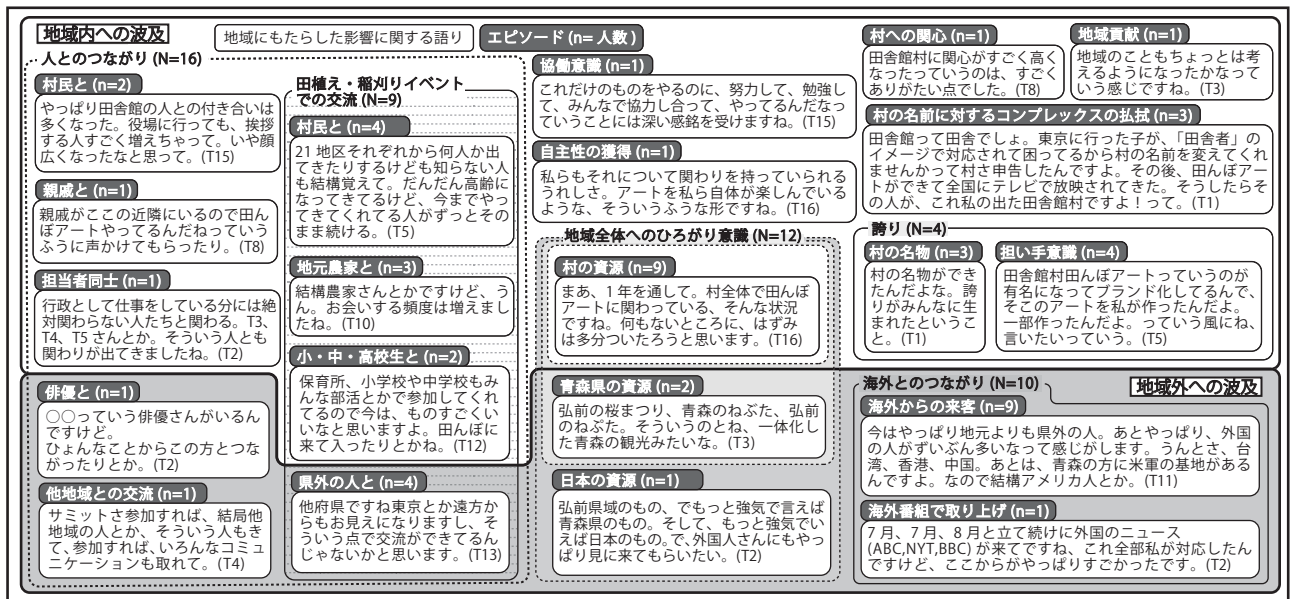


図 11 空間／田んぼアートの地域内外への波及

値を絶えず更新し、③地域内外への効果（交流・自主性・協働意識・誇りの醸成）が、次の実践を誘発する連鎖的な循環を生み出していた。この一連の過程は、「体験→更新→波及」の連鎖として捉えられ、田んぼアートが単なるイベントではなく、人間・時間・空間の変化を取り込みながら更新される地域実践であることを示唆している。

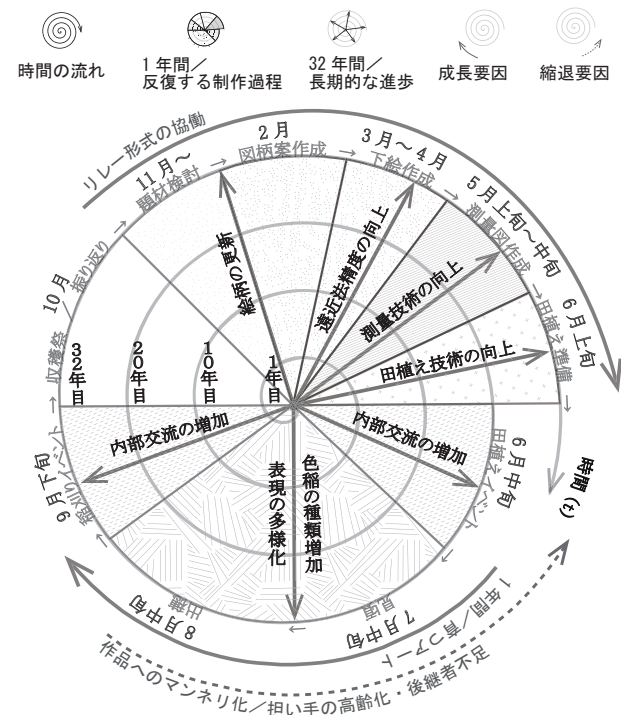


図 12 地域的意義の構造／更新される田んぼアート

第5章 田舎館村以降の田んぼアートの全国的展開

本章では、田んぼアートが田舎館村という地域の枠を越え、いかに全国的な現象へと定着しているかを解明するため、全国田んぼアート連絡協議会⁽⁶⁾の所属団体へアンケート調査を行った(表3)。ここで、回答のあった15団体の基

本情報、および各団体の目的や発祥地からの影響、地域間連携に関する回答を示す(図13・図14、次頁)。

5-1 15団体の基本概要

実施地は北海道から鹿児島に至り、田んぼアートの全国的な広がりが確認

された。実施期間に関しては、全団体が8年以上継続しており、15年以上継続している団体は過半数の8団体であった。運営主体は、行政主導型、住民有志型、農事組合法人型、企業（飲食業）型と多様な形態がみられた。特に、住民有志により運営されている団体はもれなく15年以上継続しており、地域内での自主参加や世代交代を通じた活動の維持が示唆された。観覧に関しては13団体が無料公開しており、収益化を主目的としない傾向がみられる。田植えの実施については12団体が公募制を採用しており、地域内外の住民参加しやすい開かれた形式を有している。

5-2 全国への波及と地域間のつながり

以下に、調査Ⅱから得られた具体的な内容を整理する。

5-2-1 全国の実施団体の自律的展開

1) 田んぼアートの主目的

主目的としては「観光資源としての活用」「地域住民の交流促進」「米のPR」が共通してみられた。秋田県では鉄道の乗客誘致（Z2）、岩手県では地元出身野球選手の応援（Z4）、栃木県では土地改良区のPR（Z7）など、各地域の文脈に応じた固有の目的も確認された。

2) 自地域における田んぼアートの価値

「地域の誇りである」（6件）という回答が最も多く、「全国の農業関係者との交流機会」「米づくりの後継者確保への寄与」「川辺の風景としての価値」など多面的な効果が挙げられた。総じて、担い手たちの誇り意識が活動継続の原動力であることが示唆された。

表 3 調査Ⅱ（全国調査）概要

概要
【対象】 全国田んぼアート連絡協議会に加盟する実施団体
【期間】 2025年9月22日アンケート配布～2025年10月17日
【回答】 15団体
調査方法
WEB形式のアンケート調査（回答時間10分～15分）
質問内容
(1) 基本情報 (2) 活動の背景と課題 (3) 田舎館村との関係 (4) 地域間交流 (5) 田んぼアートの価値

ID	団体名	都道府県	実施期間	運営主体	作品規模	見学科色種	下絵作成	測量図作成	田植え	展望台
Z1	JAたいせつ田んぼアート実行委員会	北海道	'06-'19,'21-'25	住民有志／農協主導	0.5-2ha	なし	6-5	外部に依頼	測量会社	公募 新設
Z2	秋田内陸縦貫鉄道沿線田んぼアート	秋田県	'14- 現在	行政主導	0.5-2ha	なし	5-5	県が公募	建設業協会青年部	声かけ 車窓から
Z3	岩手町田んぼアート実行委員会	岩手県	'08-'19,'23- 現在	住民有志	0.1-0.25ha	なし	一6	事務局／近隣小学校	測量会社	公募 簡易足場
Z4	跡呂井田んぼアート実行委員会	岩手県	'17-'19,'21- 現在	農事組合法人	0.25-0.5ha	なし	6-7	実行委員会が協議し作成	土地家屋調査士協会	公募 既存建物
Z5	おひつ勝田んぼ	新潟県	'15- 現在	企業（飲食業）	0.25-0.5ha	なし	6-6	個人で作成	なし	声かけ なし
Z6	かがみいし田んぼアート実行委員会	福島県	'12- 現在（20中止）	行政主導	0.5-2ha	なし	6-9	外部に依頼	測量会社／近隣学校	公募 既存建物
Z7	おやま田んぼアート協議会	栃木県	'12-'19	行政／土地改良区	2ha-（合計）	なし	5-5	外部に依頼	測量会社	公募 堤防／土手
Z8	田んぼアート米づくり体験事業推進協議会	埼玉県	'08-'19,'21- 現在	行政主導	2ha-	'08-	4-4	近隣小中学校から募集	測量会社	公募 既存建物
Z9	こしがや田んぼアート実行委員会	埼玉県	'10- 現在	農事組合法人	2ha-（7.5ha）	なし	5-5	事務局（観光協会）	測量会社	公募 既存建物
Z10	おひつ勝田んぼ	東京都	'15- 現在	企業（飲食業）	0.1-0.25ha	なし	6-6	個人で作成	なし	声かけ なし
Z11	田んぼアート菊川	静岡県	'08- 現在	住民有志	0.1-0.25ha	'17-	5-8	知り合い／近隣小中学校	測量会社	公募 新設
Z12	名古屋市茶屋新田んぼアート実行委員会	愛知県	'11- 現在	新田地域資源保全隊	0.25-0.5ha	なし	6-6	個人で作成	測量会社	公募 新設
Z13	田んぼアートin 榑津実行委員会	福井県	'08- 現在	住民有志	2ha-	なし	6-6	近隣小中学校から募集	なし	公募 既存建物
Z14	たべた田んぼアート実行委員会	鹿児島県	'10- 現在	農事組合法人	0.25-0.5ha	なし	4-4	個人で作成	なし	公募 新設
Z15	南九州市市川辺町田んぼアート	鹿児島県	'11- 現在	住民有志	0.5-2ha	なし	4-4	知り合い／近隣小中学校	なし	公募 新設

※色種は「色数・種類数」で表記

図 13 田舎館村以降の田んぼアート 15 団体基本情報

3) 継続の課題

「人手不足」(14 件)が最も多く、次いで「資金面」(10 件)「住民の関心」(4 件)などが挙げられた。一方農協を主体とする Z1 のような団体には担当者が自動的に交代する仕組みがあり、人手不足の懸念が小さいことが示唆された。

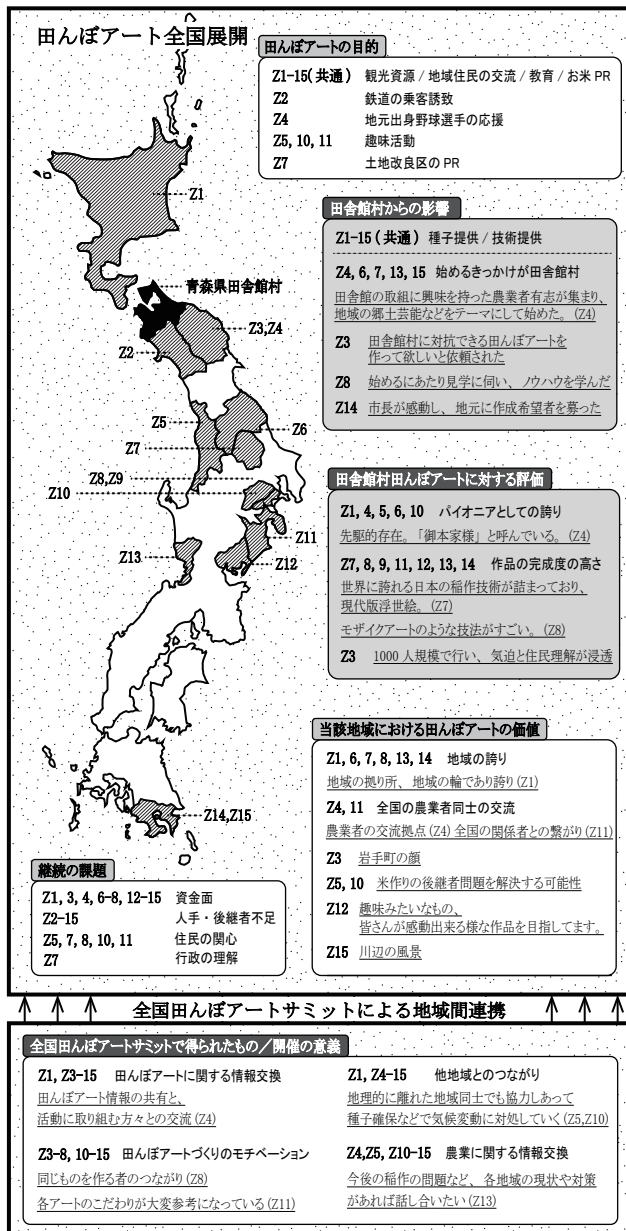


図 14 田舎館村以降の田んぼアート全国展開図

5-2-2 全国の実施団体における田舎館村からの波及

1) 発祥の地・田舎館村から受けた影響

種子や技術の提供が最多であり、同村の田んぼアート視察を契機として活動を開始した団体(5 件)も確認された。鹿児島県では市長が田舎館村の取組に感銘を受け、地元にて制作希望者を募った(Z14)。

2) 田舎館村の田んぼアートに対する評価

「パイオニアとしての先駆性」(5 件)を評価する言及や、「技術の高さ・絵柄の精密さ」(7 件)といった作品完成度への言及が見られた。

5-2-3 全国田んぼアートサミットによる地域間連携

「田んぼアートに関する情報交換」(14 件)が最多で回答された。他には、「作品づくりのモチベーション」(12 件)や「他地域とのつながり」(13 件)、「農業に関する情報共有」(6 件)も回答された。以上より、全国サミットが活動の継続を促すと共に、田んぼアートの枠を越えた農業関係者の交流を引き起こしていることが明らかとなった。

5-3 小括

以上の結果から、全国の田んぼアートは、①各地域の目的や背景に応じて多様な展開をしていること、②発祥地・田舎館村からの技術的・象徴的影響を受けていること、③全国田んぼアートサミットによる地域間連携が継続動機に寄与していることが確認された。

第6章 結言

6-1 知見の総括

1) 田んぼアートの発祥と展開過程(3章)

第3章では、田舎館村における田んぼアートの時間的・空間的・技術的展開を調査し、その基盤には地域に根付く稲作文化の踏襲と、既存の地域資源の活用があることを明らかにした。田んぼアートの持続と発展の過程においては、農学分野の品種改良や測量といった外部の技術が地域の実践と呼応しながら展開していた。運営には主導的な役割がリレーのように受け渡されていく構造が確認され、これが活動の柔軟性と持続性を支える基盤となっていた。

2) 田んぼアートの地域的意義(4章)

第4章ではヒアリング調査を行い、田んぼアートの特異性として「ふたつの時間」が確認された。すなわち、1年単位でみると自然と共生しながら稲の成育とともに変化する田んぼアートの価値があり、32年という長期的なスパン

でみると農学分野における技術進展と共に高まる作品の完成度がある。この2重の時間構造がもつ「更新性」が、地域的意義の形成に寄与していることが明らかとなった。

3) 田んぼアートの全国的展開の様相(5章)

第5章では、田舎館村の取り組みが全国に波及し、各地で独自の実践を展開していることが確認された。その過程で、地域固有の資源に応じた多様な特色が現れていることが確認された。また、地域間連携を支える基盤として、情報共有や交流の場となる「全国田んぼアートサミット」の重要性も明らかとなった。

以上を踏まえ田んぼアートの長期継続は、多層的なつながりに支えられている(図15)。

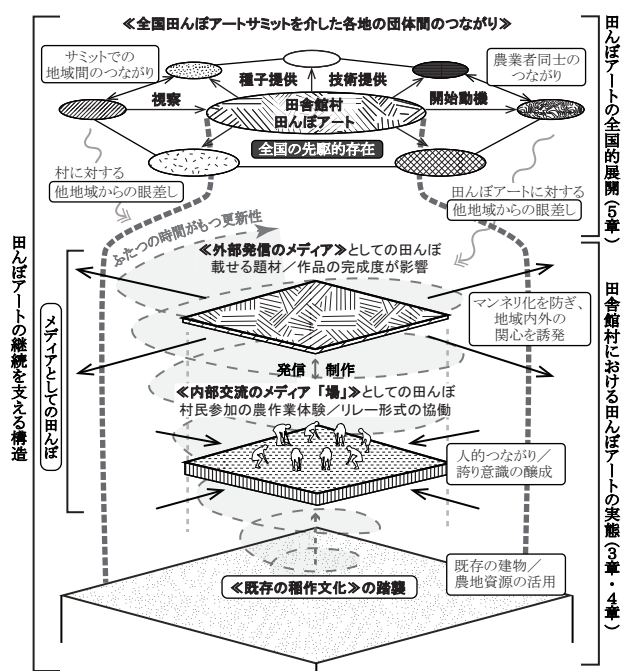


図15 田んぼアートの継続を支える構造

6-2 考察／「無手勝流のまちづくり」への視座

以下では、田んぼアートを「1次産業×3次産業直結型」の地域実践として捉えつつ、多層的に展開する共発的発展の構造を備えた事例として論じる。

1) 自然と人間の共発／“2次によらない6次”産業として

田んぼアート制作の根底には、田んぼが人間の行為を“仕切る”という自然と人間の共発構造がある。田植えや穂色の変化といった農事サイクルは、人の都合では変更できない時間軸を有する。この不可逆的な時間軸が制作の規律を生み出し、役割分担を形づくっている。ここで田んぼは「年中を通して管理する対象」であると同時に、「人を動かす環境主体」として制作を駆動している。

この基盤上で田んぼアートは、加工や流通といった2次産業的な工程を介さず、1次的な農作業の時間そのものを発信の基盤とする「1次×3次直結型」の実践となる。ここで田んぼは単なる生産の場ではなく、季節ごとの変化や手作業の痕跡を記録する「メディア」として機能する。通常、3次産業的な発信の側面が強まると、内部の担い手意

識が希薄化し、発信そのものが目的化する傾向があるが、田んぼアートでは逆の構造が成立している。農事サイクルに沿って毎年繰り返される制作が参加者に貢献実感と使命感をもたらし、特に活動の主軸を担う農家たちにとっては、自らの技術と時間が地域の象徴的風景として立ち上がることで、誇りの再生産が生じている。

2) 住民と行政のリレー形式の協働

田んぼアート制作は住民主体／行政主導の2項では捉えきれない。作品制作サイクル(図6参照)にも見られるように、田んぼアートは住民と行政、両者が交互に主導権を手渡しながらかつてきた「リレー型の協働」として特徴づけられる。こうした双方向的な運営は固定的な主従関係に回収されない。

3) ローカルな活動に閉じない他地域への展開

全国サミットを介して、発祥地を中心とした各地のノウハウが共有され、単なる模倣や系列化に終わらない自律的な全国展開をしている点で、田んぼアートはローカルな活動に閉じない共発的な外部構造を有している。

以上より、「無手勝流のまちづくり」への視座として、1次産業に由来する自然的性質と人間の共発のもとで地域が自律的に変化し続ける、計画の外側にあるまちづくりの可能性を示唆している。

【補注】

- (1)「無形学」では、共発的發展とは地域内に閉じた村おこしのような発展モデルではなく、他都市や他地域との協調・連携のもとで地域の自律を探るものである。と説明されている。(参考文献1参照)
- (2)都市計画の初期期においては、代議士のE.ハワードの「田園都市論」をはじめに、都市計画の専門家と必ずしも呼べない人々が、様々な方法で「社会改良」と称して計画を行ってきた。これを「無手勝流のまちづくり」と呼ぶなら、今回の対象もその現代的な延長にある。
- (3)田んぼアートはもともと、田んぼに色の付いた稲を植える「稲文字」からはじまった。(参考文献9参照)
- (4)整理にあたり、参考文献9, 10、ならびに田舎館村役場に対するヒアリングから入手した行政内部資料を参照した。
- (5)全国田んぼアート連絡協議会とは、実施団体の継続的な運営に関する情報交換をする全国の田んぼアート仲間の集まり。

【参考文献】

- 1)後藤春彦(2017)「無形学へかたちになる前の思考」株式会社水曜社
- 2)宮元均,加納麻紀子,水谷正一(2006),「水田,水路などを活用した「田んぼの学校」の活動実態と特性」,農村計画学会誌,第25巻,pp. 275-280.
- 3)猪谷富雄,妹尾拓司,山本涼平,小川正巳(2025),「田んぼアートおよび観賞用イネ品種の現状と課題」,作物研究,第70巻,pp. 1-10.
- 4)青木純太郎,大谷哲平,妹尾拓司,山本涼平,猪谷富雄(2019),「長浜市の虎姫田んぼアートの概要とイネ品種の葉色の推移」,作物研究,第64巻,pp. 47-51.
- 5)佐久間泰一,石井敦(2007),「千葉県鴨川市における棚田の持続的保全支援の諸形態」,農業土木学会論文集,249号 319-328
- 6)田平 厚子,麻生 憲一(2005),「観光まちづくりの地域内普及要素と持続性-安心院町のグリーン・ツーリズムによる地域振興-」,総合観光研究,04巻 53-64
- 7)森重昌之(2008),「観光を活用した地域内外の関係性構築とそのプロセスに関する研究-北海道標津町における観光を活用した地域づくりプロセスの分析-」,都市計画論文集,43,3巻 289-294
- 8)小山環,十代田朗,津々見崇(2002),「農村における都市との交流施策の類型及び展開に関する研究」,都市計画論文集,37巻p. 937-942
- 9)葛西幸男(2015)「田んぼアートのキセキ」主婦と生活社
- 10)田舎館村役場,田舎館村政要覧資料編,http://www.vill.inakadate.lg.jp/docs/2017121500010/files/yoran-data.pdf,最終閲覧日2025/10/01